講談「助立屋立助譚（すけたちやたちすけものがたり）」

あらすじ

江戸三座の一つ、市村座の大部屋役者・市村籾助（いちむらもみすけ）は器用だが目立たぬ役者だった。しかし、看板役者のセリフと所作を完璧に暗記して再現できるという特技の持ち主であることを主である團十郎に知られ、共演中の三津五郎の代役を命ぜられる。しかしそれは単なる代役ではなく「助太刀」、つまり完全に三津五郎に成りすませという無茶なものだった。籾助が観客のみならず團十郎や俳優たちをも騙しとおすという奇跡を起こすと、これを知った他の小屋の座主や幹部俳優からも「助太刀」を求められた。團十郎は籾助に助立屋立助の名を与えて送り出すが、最後の森田座の千穐楽で観客に成りすましがバレてしまう。この窮地を機転で救った團十郎は、亡き名優の再現という新しい「助太刀」を立案し、自らは亡き父との共演を、立助は先代への恩返しを果たすのであった。